

# 東日本大震災

## 復旧・復興の現場から

### NIPPO

NIPPOは、11年度の新入社員研修に東日本大震災の被災地でのボランティアを組み込んだ。阪神・淡路大震災の被災経験を持つ水島和紀社長の発案で急ぎよプログラムを変更。新入社員34人を3班に分け4月18日から順次現地入りさせて10日間の作業に従事させている。新入社員たちは、公共の仕事に携わる同社の社会的な使命を肌で感じてほしいとの社長の思いを受け止め、津波が家



屋に運んだヘドロの除去、水を吸い重くなった

畳の搬出など慣れない作業に汗を流している。通常の、仕事をする上での設定した。基本的な知識を教える集、ホテルなど宿泊施設が在、土木1班が5月20日同社の新入社員研修は、合教育と、現場での実地、営業を再開していない中、までの日程でボランティア、倒れて壊れた家具、水に漬かった畳を運び出すなど主に力作業を担当する。老人だけの住まいでは、重たいものが動かせず片付けが進んでいないケースもあり、非常に感謝されている。慣れない力作業は骨身にこたえるものの、被災者の笑顔が疲れを忘れさせてくれるという。

# 新入社員がボランティア

## プログラムを急ぎよ変更

教育の二つの研修で構成で多くの新入社員を宮城ア活動を実施している。する。本来であれば、事、県内に受け入れるため、土木2班は5月23日から務系職員は4月18日から7年前に営業を休止した、現地に入る予定だ。全国の各事業所に配属さ、旧仙台北出張所(大衡村)研修地は、宮城県内での実業務に携わる予定だ、を活用することとした。同社のアスファルト合材工場のある多賀城市、岩沼市、石巻市。今回の研修には、被災地の力になるべく、急ぎよプログラムに着手し、宮城県内の災害現場、被災地の復興に貢献する狙いもある。同研修の実施に当た、新入社員34人を事務に貢献する狙いもある。各市のボランティアセンター、土木1班(13人)、ターに登録し、被災者が求められる営業の仕事に土木2班の3グループに、のクエストに応じた生かしていきたい」との分けた。事務班は4月28日、現地での活動を行っている。

多賀城市での作業



佐藤さん

同日、被災地の復興に貢献する狙いもある。同研修の実施に当た、新入社員34人を事務に貢献する狙いもある。各市のボランティアセンター、土木1班(13人)、ターに登録し、被災者が求められる営業の仕事に土木2班の3グループに、のクエストに応じた生かしていきたい」との分けた。事務班は4月28日、現地での活動を行っている。

東日本大震災

新入社員が被災地で  
ボランティア活動

NIPPO

NIPPOは、新入社員研修の一環として、東日本大震災に見舞われた宮城県の被災地でボランティア活動を実施している。男性社員34人が3班に分かれ、6月3日まで津波で浸水した民家の片付けや泥の排出などに取り組む。

同社では例年、新入社員に対し、業務・現場研修を行い、総務系が4月中旬、技術系は5月中旬にそれぞれ別の部署に配属していた。

ことしは、阪神大震災で避難所生活を体験したことがある水島和紀社長が、新入社員に社会貢献の精神を学んでもらおうと、同社のアスファルト合材工場がある被災地でボランティア活動させることを決めた。



民家の片付けを手伝う

ボランティアは、総務系8人が多賀城市で4月18日から同28日まで活動、技術系13人は岩沼市で今月9日から20日まで、同じく13人は石巻市で同23日から6月3日まで行う。引率者として、本社工事部社員も数人参加している。

多賀城市でボランティアに参加した東北支店営業部の佐藤優希さんは「入社前から被災地に行きたいと考えていたので、ボランティアに参加する機会を与えてもらったことに感謝している。被災者の要望にどう応えれば喜ばれるかを学ぶことができた。この経験を今後の仕事に生かしていきたい」と話している。

建設通信新聞

平成23年5月16日掲載